

書 評

藤岡謙二郎・南出真助・出田和久・野間晴雄 共著
『新訂歴史地理』 大明堂 1990年6月
A4判 304ページ 3,200円

本書はかつて藤岡謙二郎・矢守一彦共著の『歴史地理』の全面改訂版といつてよいだろう。旧版から23年経過したために、内容的にはほとんど全面改訂に近いスタイルとなっている。また、最近各地で話題になっている文化財保護と歴史的景観保全も含まれており、内容もバラエティに富んでいるといえよう。以下、各章の概要について述べてみたい。

第1章「歴史地理学とその研究法」では、歴史地理学と歴史の地理学的研究の相違点について、新田開発を例に取り上げながら具体的に述べている。さらに歴史地理学の研究における野外調査の必要性和調査の方法等についてもふれ、現地調査による古景観の復原の重要性を指摘している。

第2章「環境論と歴史地理学」では、環境論的な立場から、気候の変化と文明との関連をはじめとして、海流と文明、峠・山脈と集落、平野の開発、河川・水運と集落の関連などについて豊富な事例をあげて述べている。

第3章「人口の歴史地理」では、世界における人口の変遷と主要国での人口数について、古代から現代までについて述べている。さらに人口移動については、国際的移住を中心にして、世界の人口の流れを自然的・社会的要因とも関連づけて説明している。一方、日本における人口については古代・中世・近世について述べ、近世の戸別帳や過去帳の利用価値の大きいことを指摘している。さらに明治以降の人口変動について詳細にふれると同時に、大正期における東北諸県の北海道移住者が大きい比率に関しては、今後の研究課題と指摘している。

第4章「村落・開発の歴史地理」では、先史集落として縄文時代・弥生時代・古墳時代の各集落址を各々一例あげながら、各時代の住居の形態、平面プラン、環壕の機能（ここでは弥生時代）、集落の機能などについて詳しく言及している。

古代では条里制について、地割の起源と呼称法を含めた制度の起源の2つを分けて考える必要性を指摘している。そして地割は6世紀末ないし7世紀初頭に、畿内の一部で地域的に先行的施行をみたとして述べている。古代における集落の形態について、従来

は集村的なものとして捉える傾向が強かったが、奈良盆地の事例をあげて、最近では小村・疎塊村・孤立荘宅など広範囲に分布し、かなり変化に富んでいると結んでいる。

荘園村落については富田庄の絵図を事例にして、従来の諸説をふまえながら、地籍図や空中写真から荘園内部のダイナミックな景観変遷を把握する方法を述べている。一方、城館については、様々な変化に富みその遺構が多い高知平野について述べ、知行地と城館との位置関係、本城や支城の関係などについても考証をすすめることによって当時の地域構造を推測できるのではないかと結んでいる。

近世の村落については、村落内部の空間構造について地方史料を駆使して復原した畿内の事例をあげて述べ、村落間の結びつきについては水利集団の分布から奈良盆地を取り上げている。

第5章「文化・民俗の歴史地理学」では、文化地理学との接点を求めてクローバーの文化領域について、次いでパークレー学派サウアーの文化地理学についての考えを詳細に述べ、宗教が地表に刻まれた文化地域としてモルモン宗教地域を取り上げ、その発展過程を紹介している。一方、歴史地理学における民俗資料の取り上げかたについて「餅なし正月」を事例に述べている。さらに民俗地名と公称地名の留意点について、絵図に見る認識については北上川の水路図が紹介され、この地図から何を読みとるかがそれぞれ指摘されている。

第6章「都市の歴史地理」では、古代都市として古代エジプト・メソポタミア・インダスと黄河流域、中国の長安と洛陽、ギリシヤ・ローマの都市を取り上げ、その概要とプランの特色について述べている。そのなかでギリシヤ・ローマ都市は古代オリエントや東アジアの都市と異なり、アゴラやフォーラム等市民の公衆の広場をもつ、より民主的な都市として発達し、権威ある帝王の宮殿を中心として発達しなかった点を強調している。

日本の古代都市としては畿内の帝都についての概要が述べられ、そのなかで平安京のプランについて詳細にふれている。国府については従来5～8町のプランをとるといわれていたが、府域を画する施設がない事例もあり、実態が多様であることを指摘している。

封建都市ではヨーロッパの中世都市を取り上げ、ゲルマン民族の移動にもかかわらず古代ローマ都市が中世以後へ持ち越した事例をあげている。ここには記されていないが、意外に軍団の置かれた都市が多い共通性があげられよう。中世都市へのきっかけとなった Wik についても述べているが、中世都市成立の事例としてマグデブルク、ドレスデン、農村地帯が都市的集落に変化したヘリフォードについて言及している。

日本では敦賀の古代・中世との比較、中世後期の寺内町プランについてふれているが、「町」と街路との関係も重要な指摘であろう。

第7章「生産の歴史地理」では、農業の歴史地理について、農耕と家畜との関係、水田遺構の歴史、灌漑水利の発達と耕地開発についてふれている。そのなかで群馬県では火山砕屑物（テフラ）による層位学的な発掘調査が進められている。とくに天仁元年（1108）の年限をはさむ水田遺構は、その区画の相違、取水源の変更、地形と水田との関係を考える上で重要な問題を提起しているといえよう。鉱工業の歴史地理では日本の古代・中世・近世について概説し、外国では産業革命前夜のイギリス製鉄について述べている。

第8章「商品流通の歴史地理」では、古代・中世の流通について「市」を中心に論が進められている。特に中世の代銭納システムや流通システムの時代変化に伴う市町の発展・変遷について、土佐国を事例にあげて述べている。

近世の流通に関しては大坂の「登せ米」や大坂における諸商品の流通を、藩内の流通については信州上田藩を取り上げ、詳しく紹介している。

第9章「交通の歴史地理」では、古代から明治の鉄道開通に至る各時代の交通について概説している。古代では駅路が帝都を中心に放射状に派生し、可能な限り最短距離、すなわち直線で結ばれ、条里地割などともあわせ、きわめて全体的な地域計画のもとに設定されていたことを指摘している。中世では巡礼街道、畿内の寺社に納める貢納米を運ぶ年貢米輸送ルートについてふれている。外国では中国の交通路について、次いでシルクロードやローマンロードについて述べている。

第10章「政治の歴史地理」では、日本および世界各国の政治的領域の変遷を中心に、境界の地理的意義や藩政時代における飛地などを取り上げている。

さらにエクメーネの拡大と世界の植民化・戦争による領土の変動や、第二次大戦後の国々の誕生についても詳しく述べている。

第11章「日本の近代化」では、日本の近代化に関する歴史地理的概観を試みる。とくに明治以後における都市の発達過程を6期に区分し、都市システムについて論じている。

付論「近年における歴史地理学の動向」では、隣接諸科学との関連から地図の利用法にもふれている。研究動向については、その傾向が良く把握されている。

多岐にわたる歴史地理学の分野を網羅して、しかもコンパクトに要約することは容易ではない。おそらく原稿になるまで多くの苦労があったと察せられる。コンパクトにまとめることは、ある意味で地形図のように取捨選択しなければならないことになる。したがって、各章ごとにこの点についてはぜひふれてほしかったと願うのは無理であるかもしれない。以下、感じたことを若干述べてみたい。

歴史地理学にとって関連の深い考古学の成果を無視することはできない。だからといってすべての報告書をみることは不可能に近い。それでも、注目される報告書は少なくとも注および参考文献にあげてもいいのではないだろうか。若干の例をあげると、日本における古代の人口で沢田吾一の説を引用しているが『鹿の子C遺跡』（茨城県教育財団、1983）には、検出された漆紙文書に奈良末から平安初期の常陸国の人口があり注目される。その総数は19万2044と19万1660の2案が考えられるという。この数字は神戸・封戸の口数が少ないことから、もう少し人口がふえるとみられる。それでも19万人台とすれば、沢田が推測した21万6900人と1割程度の誤差しかないことになる。このように律令時代における一国の人口がほぼわかる史料だけに、見過ごすわけにはいかないだろう。

統一した大規模条里のなかに残された局地的な異方位条里を、第4章でいう畿内の一部で6世紀後半ないし7世紀初頭に地域的に先行して施行された条里とすれば、守山市の赤野井遺跡（『滋賀県文化財調査年報』滋賀県教育委員会、1976）は、この好例で芦浦屯倉との関連も考えられるだけに参考文献にでもあげてほしい。

日本最古の地図として著名な弘福寺領讃岐国山田郡田図は、奈良時代の文書で明確に現在地への比定

ができるが、その比定地にあたる高松市で発掘調査が続けられ、既に4冊の報告書（高松市教育委員会、1987・1988・1989・1990）が刊行されている。その他では、鵜庄絵図の比定地にあたる太子町でも一部発掘を伴った詳細な報告書（1988・1989）が2冊刊行されていて大変注目されるだけに、鵜庄に関する従来の論文などとあわせて読むと、より深い理解ができるのではないだろうか。さらに土佐国でふれてある城館も、中世城館跡（南国市教育委員会、1985）を参照すれば、参考になる点が多いと思われる。なお、『埋蔵文化財ニュース51（1985）』には、全国の城館址発掘調査・分布調査報告書一覧があり、便利である。

以上、若干の発掘報告書を取り上げたが、まだよりよい報告書があるかもしれない。要は、各章にある論文・単行本に関連する発掘報告書があるか否か、つねに気を配ることであろう。

ささいな事であるが、第10章では文中にシレジア、地図中にシュレジェンとあるが、かつてドイツ領、現在ポーランド領であるので、文中にはポーランド語のシロンスク（英語ではシレジア、またはドイツ語でシュレジェン）と表記したほうがよいのではないだろうか。ドナウ川・ダニューブ川の2通りの表記があるが、前者に統一すべきであろう。

第9章にイースト（1950）のローマンロードの地図が記載されているが、既に40年を経過し、その間にローマンロードの研究も進んでいるので、できるだけ新しい地図を入れるべきであろう。ヘルマン・シュライバー（1988）の『Auf Römerstraßen durch Europa』の口絵などは最適ではないだろうか。なお、この本は『古代ローマへの道』（河出書房新社、1989）として訳本がでているが、地図は大幅に削られ口絵もカットされている。この口絵とイーストのそれを比較しても、かなり相違点がみられる。

以上、若干コメントしたが、多岐にわたる歴史地理学の内容をコンパクトに要約されたことに敬意を払いたい。文章を読んでいて、注および参考文献以外の論文を多数読んでおられることをたびたび感じた。力量不足で的確はずれの書評になり、著者4人には申し訳なく御海容を願う次第である。

（日野尚志）

森栗 茂一 著

『河原町の民俗地理論』

弘文堂 1990年7月

A5判 309ページ 5,800円

変化の少ない常民の村落文化を前提に成立した民俗学は、加速度的に変わりつつある現代の生活文化に直面して、その対象・方法ともに新しい方向を求めて混沌の時代にあるといわれる。この現状の打開をめざし、様々な検討がなされているが、若手研究者を中心に進められている取り組み、例えば、消えゆく民俗に代えて現代社会で進行しつつある民俗現象を扱い、研究者自身の生活のなかから主観主義的にとらえる研究方向などもその一つといってよい。

本書は、このような新しい民俗学の方角の可能性を探ろうとする著者が、都市形成の原点を河川敷にできた河原町に求め、村落に足をふまえた従来の民俗学に対する都市の民俗学の確立をめざした試みである。これを「民俗地理論」と呼んだのは、著者の言によれば、民俗現象を地理の方向性によってとらえる視点に基づくものであるという。もっとも、民俗現象を地理学的に扱うというよりも、地理的事象を民俗学の立場からみるほうに力点があるようにも思えるが、民俗と地理との接点を求めようとする著者の考え方が書名に表われているといえる。内容の概略と、各章での著者の主張の要点を紹介しよう。

序章の役割を兼ねた「はしがき」では、文化変容の著しい現代は民俗学の存亡をかけた危機の時代であるとし、今要求されている新しい流れのうち都市民俗学に関しては、歴史都市のトポグラフィや現代都市民俗を述べる前に、都市の形成史を論じることの重要性を指摘する。その上で、本書を、「ハレ・ケ・ケガレ」理論と社会史の成果に基づいて、河原という「場」の問題から都市の形成に接近しようとした著書であると位置づけている。

第1章「都市形成と現代民俗」では、産業化と情報化の波のなかで岐路に立つ民俗学の現況を改めて概観し、その主体性の確立を都市民俗のなかでとらえるという方法論的立場が述べられる。本書のねらいとする都市形成史に関しては、用語の検討を時代を追って行い、古代以来の農業集落であるムラ、中世以降ムラの漸移境界におこった非農業集住のイチ、政治的意図を含む集住空間のミヤコ、集落内の町場空間とミヤコ・イチを含めてマチと定義する。さらに、近代都市形成のモノグラフとして、神戸に集ま